

## 第4章 イノシシ類利用について

イノシシ類は、生息圏が人間と重複していたことやその肉質の高さから、野生段階から重要な食料資源の一つとみなされ、主要な狩猟対象獣として盛んに捕獲がなされてきた。その後、食性の広さや多産性というイノシシ類の生物特性が飼養に適していたこともあり、定着的農耕の普及と相前後する形で家畜化が試みられ、農耕文化を代表する飼養動物となったことは広く知られるところである。新石器時代の遺跡からは、家畜化過程にあるとされるイノシシ類の遺存体の出土が、アジア各地で報告されている（大貫 1998、浙江省文物考古研究所 2003、臼杵 2004 など）。日本列島では、列島内で野生イノシシが家畜化されたとする説（金子・牛沢 1980）と、大陸側から家畜化されたイノシシ類が移入されたとする説（直良 1937b、西本 1989）とに大きく分かれており、形質的特徴や出土獣類に占める割合、年齢構成などの検討に加え、近年では古 mtDNA 分析や安定同位体分析をも導入した議論が活発に進められている（西本 1991、1993、姉崎 1999、西中川 1999、小沢 2000、松井他 2001、石黒他 2001 など）。しかし、イノシシ類の家畜化は、野生イノシシの生息圏において多元的になされたとみられることから、その過程の復元は、考古資料に基づく家畜化の認定基準の問題とも相俟って、とりわけ困難な課題とされる（野澤・西田 1981）。

本研究で対象地域としたサハリンと北海道は、野生イノシシの生息圏外にあたるが、遺跡からは遺存体をはじめとする関連遺物が見出されることが少なくない。両島嶼は、野生イノシシが生息する大陸と本州との間に位置し、そのいずれかからイノシシ類の移入が図られたものと推測し得る。そのため、両島嶼におけるイノシシ類利用の問題は、生業に関わるだけでなく、大陸からサハリン、日本列島にかけての環日本海北部を舞台とした南北相互の交流について復元していく上でも、きわめて重要な検討課題の一つと位置づけることができる。そのため、本章ではまず、イノシシ類の遺存体とそれを素材とした製品、さらにはイノシシ類を模った動物意匠遺物を集成し、イノシシ類利用の時期的変遷と地域性について明らかにすることを試みることにする。

### 第1節 イノシシ類について

イノシシ (*Sus scrofa*) は分類学上、偶蹄目（ウシ目）イノシシ科イノシシ属に属する。イノシシ属動物には、本論で取り上げるイノシシの他に、ヒゲイノシシ (*Sus barbatus*) やスンダイボイノシシ (*Sus verrucosus*)、コビトイノシシ (*Sus salvanus*) の3種がみられる（田中 2001）。このうち、人間によって家畜化されたのはイノシシのみとされるが、ヒゲイノシシやスンダイボイノシシがアジアの在来ブタに影響を与えたとする説もあり、未解決の部分が残る（田中 1996）。

野生イノシシは、アジアからヨーロッパ、アフリカ北部にかけて広く生息し、多くの亜種に分類される（阿部 1994、仲谷 1996）。また、四肢が短いという形態的特徴から雪に弱いとされ、北東アジアにおいてはアムール河流域やアンガラ河流域、バイカル湖東部、日本列島の東北地方が野生状態での生息域の北限となる。

イノシシ類には性的二形が認められ、体格と犬歯は相対的に雄の方が大きい。怒ると背の毛が針のように立ち、強大な犬歯を振るい人間に向かってくることもあるという（人見 1981）。また、跳躍力に優れているため（註 1）、猪害防除のための猪垣（矢ヶ崎 2001）や、捕獲用の陥穴（今村 1983、佐藤 1989）は、1m 以上もの高さが必要とされる。しかし、学習能力が高いために、扱い方に注意を払えば飼い馴らすことが可能で、特に、幼齢期から飼い続けることで人間にも馴れ易くなるとされる（田中 2001）。そのため、現在では、放し飼いにされている地域も多い（黒澤 2001）。

イノシシ類に対する人間側の介入は古くから多元的に進められたため、現在の家畜ブタの品種数は 400～500 にも上る（田中 2001）。ただし、多くの飼養動物が、家畜化によって食肉以外の用途を付加していったのに対し、イノシシ類は家畜化された後も一貫して食肉用の動物と位置づけられたことから（Bökönyi 1974）、品種間の形態差はイヌなどに比べて少ない。野生イノシシでは毎年春に一回分娩し、3～5 匹の仔を産むのが常であるが（仲谷 1996）、家畜化の進んだ現代のブタでは周年繁殖が可能で、年 2.5 回の分娩を行い、一腹産仔数は 10 頭以上にも上るといふ（正田 1987）。これはもともと多産であったイノシシ類の特性を、人間側が意識的に選択し、向上させた結果である。

イノシシ類の骨格は、第 1 章で示したように、多数の部位から成り立っている（図 4）（加藤・山内 1995a、b）。

頭蓋骨は複数の骨で構成されており、成長とともに一部の骨が癒合する（図 5）。下顎骨は左右一対の骨であり、イノシシ類では、成長とともに左右が癒合する。

イノシシ類の歯は、乳歯から永久歯へと一度生えかわる二生歯性である（後藤・大泰司 1986）。犬歯は一生伸び続けるが、上顎と下顎の犬歯が咬み合って常に削られるため、長くなることはない（正田 1987）。林良博氏ら（Hayashi et al. 1977）による野生ニホンイノシシ（*Sus scrofa leucomystax*）の下顎における歯牙萌出・交換プロセスの研究によれば、生後 7～8 ヶ月程度の個体では第一後臼歯の萌出が認められ、生後 19～20 ヶ月の個体では第二後臼歯の萌出が認められる。さらに、生後 31 ヶ月以降の個体では第三後臼歯の萌出が完了しているのが確認できるという。野生のヨーロッパイノシシ（*Sus scrofa scrofa*）を対象とした研究でも、類似した観察結果が得られている（Matschke 1967）。ただし、家畜化によって、歯牙萌出の時期が早まるとの指摘があるため（Bull and Payne 1982）、家畜化過程にある資料については、具体的な死亡年齢の推定が困難といえる。そのため、本論では、第一後臼歯のみが萌出している個体を「幼獣」、第二後臼歯が萌出した個体を「亜成獣」、第三後臼歯が萌出した個体を「成獣」として区別するにとどめる。なお、永久歯が萌出完了した段階以降の個体についても、歯の咬耗状況に基づく年齢区分が提示されているが

(Hayashi et al.1977、新美 1991)、歯の咬耗は加齢のみが要因ではなく、食料などの要素も深く関与するとみられるため、本論では参考程度にとどめることとした。

脊柱（椎骨）は、50 個程の骨で構成されている（加藤・山内 1995a、b）。頸椎は 7 つあり、他に、胸椎が 13 個、腰椎が 6 つ、仙椎が 4 つ、尾椎が 20～23 個ある。なお、現代のブタでは、ロースやベーコンと呼ばれる背と腹の肉が多くなるように胴が長く改良されているため、胸椎と腰椎を合わせた数はイノシシよりも多く、平均 21 個程（多いもので 24 個）である（田中 2001）。それぞれの数は個体ごとに前後する場合がある。なお、仙椎は成長するに従って 4 つが癒合し、一つの仙骨となる。肋骨はイノシシで 13 対、現代のブタでは 14～15 対のものが多く、前位の数対は直接胸骨と関節する。胸骨は 6 つの不對な分節からなる。

前肢骨は、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨 4 つの他、指骨である基節骨、中節骨、末節骨各 4 つなどで構成され、後肢骨には、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨、距骨、中足骨 4 つの他、趾骨である基節骨、中節骨、末節骨各 4 つなどが含まれている。イノシシ類の前肢、後肢はともに 4 指（趾）で、歩行様式は、蹄で覆われた末節骨の先端のみを地面につける蹄行性である（加藤・山内 1995a）。なお、イノシシ類では、イヌやヒグマのような食肉目の雄にみられる陰茎骨を欠いている。

## 第 2 節 出土資料

### （1）遺存体

#### a. 縄文時代における遺存体（表 19、20、図 38）

縄文時代に属するイノシシ類の遺存体は、北海道の 50 程の遺跡から確認されている。この数字は、生息圏外とされる地域からの出土例としてはきわめて多いものといえよう。この中でもっとも古い事例は、前期中葉に属する白老町虎杖浜 2 遺跡事例（北海道埋蔵文化財センター 2001）である。この遺跡からは、計 4 点が確認されているに過ぎないが、どれも被熱し、うち 3 点は盛土遺構から出土したものであるという。つづく中期に属する遺存体の確実な出土例は、これまでのところ知られていない。

後期になると、道央部と道南部を中心に出土事例は急激に増加し、イノシシ類の利用の程度やその内容には地域差が明瞭に認められるようになる。石狩低地帯を中心とした地域では、イノシシ類の遺存体の多くが被熱し、盛土や周堤墓（環状土籬）、焼土などから出土するのに対して、渡島半島から内浦湾岸にかけての地域では、被熱骨は稀で、後述するように、歯牙を素材とした製品の出土が多いのが特徴である。前者では、イノシシ類以外にも多くの動物の遺存体が被熱した状態で出土しているが、恵庭市カリンバ 3 遺跡（北海道恵庭市教育委員会 2004b）や千歳市キウス 4 遺跡（財）北海道埋蔵文化財センター 1998、1999、2000、2001b、2001c）、同美々々 4 遺跡（北海道教育委員会 1979、（財）北海道埋蔵文化財セ

ンター1981a、高橋 2001)、苫小牧市柏原 5 遺跡(苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター1997)などではイノシシ類の出土量が多く、被熱骨に占めるイノシシ類の割合もかなり高いと報告されている。以上に見るような骨の状態や出土地点の特殊性から、この地域で見られるイノシシ類については、儀礼に関連して利用された可能性が指摘されることも多い。また、キウス 4 遺跡((財)北海道埋蔵文化財センター1998a)では、成獣や幼獣を含めた個体群が維持されていたとみなされ、何らかの形でイノシシ類の「飼育」((財)北海道埋蔵文化財センター1998a: 347 頁)が行われていた可能性が指摘されている。美々 4 遺跡(北海道教育委員会 1979、(財)北海道埋蔵文化財センター1981a、高橋 2001)では、四肢骨が少ないのに対して歯牙が多く、犬歯を道具素材とするために顎骨を伴って持ち込まれた可能性が指摘されている。事実、この遺跡からは、上顎犬歯製の有孔品 1 点の他、未製品もしくは未加工の歯牙が複数得られており、1979 年の調査で出土した歯牙や顎骨も被熱していなかったという。ただし、報告者も指摘するように、この遺跡からは四肢骨の出土も少量ではあるが認められており、さらに幼獣骨も含まれることから、それらが持ち込まれた意味についても検討する必要がある。一方、柏原 5 遺跡(苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター1997)では、四肢骨が非常に多いのに対して、犬歯やその加工品が全く認められないと報告されている。成獣が主体であり、このような大型の成獣は解体され、幼獣は丸のまま持ち込まれたのではないかと推測されている。

美々 4 遺跡でみたような出土部位の偏りは、噴火湾岸に位置する虻田町入江貝塚(西本 1985、北海道虻田町教育委員会 1994、大島・角田 1995、高橋 2001)でも認めることができる。この遺跡では、顎骨が多いのに対して四肢骨が少なく、後述するように、歯牙製品が 6 点出土している点が目を引く。また、道北端部に位置する礼文島の遺跡でも、イノシシ類の犬歯や犬歯製の製品が出土しているが(児玉・大場 1952、西本 1985、北海道礼文町教育委員会 2000)、歯牙以外の部位は確認されていない。

後期末葉から晩期に属する乙部町三ツ谷貝塚(渡辺 1965、西本 1985、金子 1986)でも、上顎骨、下顎骨が高い割合で出土している。骨が壊され、犬歯が抜かれたような痕跡も認められることから、歯牙が道具素材として利用された可能性が高い。この遺跡では、幼獣や亜成獣の全身骨が認められているため、生体の持込もあり得たかもしれないとされるが(西本 1985)、亜成獣の割合が低いことから、翌年まで飼養していたことは疑わしいと述べられている。骨は被熱していないという。なお、三ツ谷貝塚から 10km 程内陸に位置する厚沢部町稲倉石岩陰遺跡(厚沢部町教育委員会 1979)では、少量の遺存体が得られていることから、三ツ谷貝塚からの持ち込みではないかと推測されたことがある。しかし、後期中葉に属する稲倉石岩陰遺跡の資料は、三ツ谷貝塚より古く位置づけられることが明らかであるため、その可能性は否定できる。

晩期にも、後期と同様に、多くの遺跡からイノシシ類の遺存体が得られている。中心地域は石狩低地帯から苫小牧市にかけてであるが、この時期には、前時代に出土例の多かった渡島半島沿岸部での出土がほとんど認められなくなる。その代わりに、それまで出土例のな

表19 イノシシ類の遺存体と製品の出土遺跡一覧(1) 縄文・続縄文時代

No.	遺跡名	遺存体 / 製品*						備考	出典
		縄文				続縄文			
		前	中	後	晩	前	後		
1	船泊			- / 1				竪穴床面より出土	1
2	船泊砂丘第四			- / 1					2
3	船泊砂丘(試掘)			△				犬歯1点のみ	3
4	浜中2					△		混入?	4
5	種屯内					(△) / 1		遺存体は混入?	5
6	計根別桜井				(? / 1)				6
7	緑ヶ岡1				△			墓から下顎2個体分が出土(副葬品)	7
8	幣舞				△ / 13			焼骨含む、遺存体・製品ともに墓から出土する例あり	8
9	相生1				△			被熱	9
10	油駒				○			被熱、成獣のみ、頭部なし	10
11	旭町1				△			被熱	11
12	額平川				△			被熱	12
13	無頭川				△			被熱、幼獣のみ	13
14	長沼町12区B			△				歯牙2点のみ、焼土から出土	14
15	西島松5					(△)**		焼土から出土	15
16	柏木川7			△				被熱	16
17	カリノバ3 低地面 段丘上			○				焼骨あり(焼土や灰からの出土例あり)	18
18	ウサクマイN				△			被熱	20
19	末広			△				被熱、環状土離に関連	21
20	梅川3				?			焼骨あり	22
21	キウス4			△				盛土土壌から多く確認、成獣多いが幼獣も出土、飼育?	23
	A・H・K地区			△				被熱	24
	R地区			△				被熱、土壌や焼土より出土	25
	Q地区			△				強く被熱、盛土遺構より出土	26
	D・F・G地区			○				被熱、盛土より多く出土、成獣多い	27
22	ママチ				○			被熱、土壌(墓?)からの出土例あり、幼〜成獣まであり	28
23	美々2				△			イノシシ?、被熱	29
24	美々3				△			被熱(焼土より出土)、成獣	30
25	美々4 呑口			○ / 1				四肢少なく歯牙多い、幼〜成獣まで出土、他に未製品・未加工品3点あり	31
	水つき部分			○				被熱(焼土に伴うもの多い)	32
					○			焼骨多い、幼・成獣を含む	33
26	チブニー2				△			被熱	34
27	美沢東6				△			被熱(焼土より出土)	35
28	拍原5				◎			焼骨多い(下顎などは非被熱)、四肢中心、成獣主体	36
29	拍原18				△			被熱、成獣	37
30	静川				○			被熱	38
31	共和				△			被熱、成獣、犬歯が抜かれる?	39
32	社台1				△			被熱、成獣含む	40
33	虎杖浜2	△						被熱、盛土や包含層より出土	41
34	ボンナイ					(△)		大半が幼獣	42
35	シクツ、(祝津?)				(△)			「貧弱ながら出土」	43
36	有珠10				(△)			歯牙1点のみ	44
					(+)				45
37	南有珠6					△		大型	46
38	オヤコツ				(△)				47
39	有珠善光寺(A)					△		貝層を開り窪めて頭を収め、その上に石を積み重ねた石塚3基あり	48
40	有珠善光寺2				(△)				49
					(○ / 1)			四肢より顎多い、成獣より幼獣多い	50
41	有珠ボンマ			△				歯の破片のみ	51

表20 イノシシ類の遺存体と製品の出土遺跡一覧(2) 縄文・続縄文時代

No.	遺跡名	遺存体 / 製品*						備考	出典
		縄文				続縄文			
		前	中	後	晩	前	後		
42	黄金蕊(北黄金?)				(△)			「貧弱ながら出土」	52
43	ワッカオイ(若生?)				(△)			「貧弱ながら出土」	53
44	入江遺跡			+ / 2					54
45	入江貝塚			△ / 6				顎多く四肢少ない、幼～成獣まで含む、焼骨を含む	55
46	礼文華						(+)		56
47	照岸洞窟				? / 1				57
48	発足洞穴				(+)				58
49	栄巖岩陰				△			切歯1点のみ	59
50	貝取淵2洞窟					△		犬歯のみ1点のみ、石組炉から出土	60
51	鮎川洞穴				? / 1				61
52	三ツ谷				◎			全身骨含む、顎が四肢より多い、幼～成獣まで含む、犬歯などが抜かれる	62
53	稲倉石岩陰				△			幼・成獣含む	63
54	寺町		- / 1						64
55	新道4				△			焼土より出土	65
56	桔梗		(+)					「普通に見られた」	66
57	煉瓦台				(+)			「普通に見られた」	67
58	湯ノ川				(+)			「普通に見られた」	68
59	天祐寺				(+)				69
60	戸井				+ / 2			種名のみ記載	70
61	恵山 巖下 (採集品)					△	(? / 3)	被熱	71
62	コタン温泉				- / 1				72
63	桜町						?	イノシシ? 被熱(焼土・土壌より出土)	73
							?		74

\* 遺存体欄の記号は哺乳類中の割合を示す 主体:◎、多め:○、少ない:△、割合不明:+、出土なし:-、出土の有無不明:?

製品欄の数字は出土点数を表す

( )内は、所属時期の断定が困難な資料である

\*\* 所属年代は続縄文～檜文と報告されている

No. : 縄文時代は図38、続縄文時代は図39の遺跡番号に対応

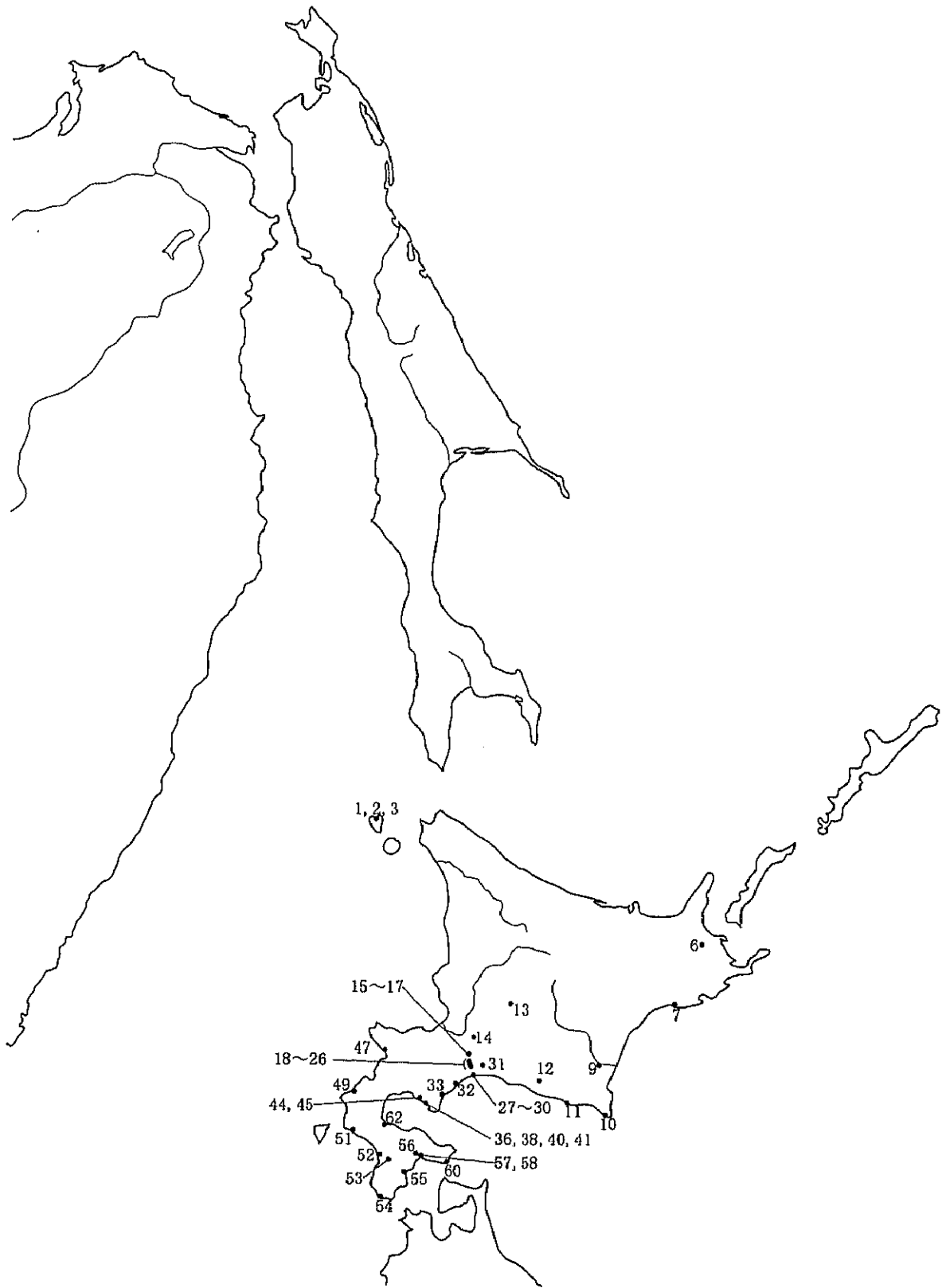


図 38 イノシシ類の遺存体とそれを素材とした製品の分布(1) 縄文時代

かった道東部にかけての太平洋岸で、遺存体の出土が報告されている点は注目される。石狩低地帯以外の内陸部で出土が認められるのも、この時期の特徴である。石狩低地帯から苫小牧市を中心とする地域では、被熱骨が数多く出土する。千歳市ママチ遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1983b）や同美々4遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1997）では多くの被熱骨が認められており、後者では、ある程度の個体数の存在が考えられることから、「儀礼を含めたより大きな必要性からシステムティックなイノシシの導入、ひいては何らかのレベルの「飼育」などが行われていた可能性は低くはない」（(財)北海道埋蔵文化財センター1997：210頁）と述べられている。晩期に属する可能性がある伊達市有珠善光寺2遺跡（北海道伊達市教育委員会1988）では、四肢骨より顎骨が多いことが指摘されており、厚真町共和遺跡（苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター1987）でも、出土した下顎骨から犬歯が抜かれた可能性があるなどとされるなど、前時代と同様に、歯牙が道具素材として利用された可能性もうかがえる。また、出土状況において注目される事例としては、千歳市ママチ遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター1983b）で、墓壙の可能性のあるピット中から被熱した指(趾)骨がヒグマやエゾシカの被熱骨とともに出土した事例や、釧路市緑ヶ岡1遺跡（沢1969、宇田川・澤1984、）で、人骨3体が合葬された墓壙中に下顎骨2個体分が副葬された事例を挙げることができる。後者は、雄と雌の下顎骨であったという（高橋2001）。

以上のように、縄文時代の北海道で多くみられたイノシシ類の遺存体は、野生イノシシの生息圏外にあたることや、祭祀的な意味合いの強い遺構から出土する例の多いこと、被熱骨が数多く見られることから、非実用的な意図で用いられたとする見方が大勢を占める（西本1984b、1985、川内谷1985、金子1986、高橋2001など）。また、その供給地については、本州（特に東北地域）が有力視されてきたが、近年、虻田町入江貝塚出土資料（縄文時代後期）について古 mtDNA 分析が試みられた結果、本州に生息するニホンイノシシの A 群（日本全国に分布するが、北に分布する傾向がある）であることが示され、当該期のイノシシ類が東北地方から持ち込まれたとする説を補強する結果となった（石黒・山崎2001）。

サハリンでは、縄文時代に併行する時期の動物遺存体の報告例がこれまでのところ知られておらず、イノシシ類の利用の有無や程度については不明である。

#### b. 続縄文時代（アニワ文化期）における遺存体（表 19、20、図 39）

続縄文時代に属する遺存体の出土数は、前時代に比べて大きくその数を減じる。特に、縄文時代後期、晩期にかけて中心的な出土地域であった石狩低地帯では、続縄文時代から擦文文化期に比定されている恵庭市西島松5遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター2002b）や縄文時代から続縄文時代のいずれかに属するとされる千歳市ウサクマイ N 遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター2001a）を除いて、出土例が皆無となる。

前半期に属する遺存体は、内浦湾岸に位置する伊達市南有珠6遺跡（北海道伊達市教育





図 39 イノシン類の遺存体とそれを素材とした製品の分布(2) 続縄文時代

委員会 1984、高橋 2001) と同有珠善光寺(A)遺跡(峰山 1972) から得られている。前者では、大型の脛骨 1 点が認められているのみであるが、同遺跡からは、北海道に生息しないツキノワグマとみられる骨も得られていることから、本州との関連性が指摘されている。また、後者では、「貝層を掘りくぼめて猪の頭を収め、その上に石を積み重ねていねいに葬った石塚が 3 基あった」(峰山 1972 : 77 頁) とされる。このような特異な出土状況は、前後の時代を含めても類例がない。この他にも、同時期の資料が渡島半島沿岸部から少量ではあるが得られている。恵山町恵山貝塚崖下部分(尻岸内町教育委員会 1984) の調査では、被熱した末節骨 1 点のみが出土しており、日本海に面した大成町貝取瀬 2 洞窟遺跡(北海道開拓記念館 1996) では、犬歯 1 点のみが石組炉から出土している。道東部の釧路市幣舞遺跡(北海道釧路市埋蔵文化調査センター 1996) でも、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭に属する遺存体を得られているが、出土量は少量に限られる。このうち、98 号墓壙の上面で認められた大形の下顎骨は、葬送儀礼に関わる可能性があり、注目される。この時期には、道北端部に位置する礼文島、利尻島からも、遺存体の報告例が見られる。ただし、礼文町浜中 2 遺跡(西本編 2000) では 1 点のみの出土に限られることから混入の可能性が指摘されており、利尻町種屯内遺跡(前田・西谷 1997、種屯内遺跡調査団 1998~2002、2004) でも、遺存体の出土した層が、オホーツク文化期の層と接していることや、当該期の魚骨層や貝層から歯牙製品 1 点以外には遺存体の出土がみられないことから、所属時期の確定が困難である。

後半期に属する確実な資料は、現在のところ、知られていない。七飯町桜町遺跡(北海道亀田郡七飯町教育委員会 2000) で、イノシシ類の可能性のある被熱した指(趾)骨が前半期と後半期の層でそれぞれ得られているが、イノシシ類であるとは断定されていないため、記すにとどめる。

以上、通観したように、続縄文時代の北海道においては、前半期に内浦湾岸から渡島半島にかけて出土例が散見される他は、資料が絶対的に少なく、後半期には、確実な出土例が皆無になるなど、イノシシ類に対する需要や利用の程度が縄文時代に比べて低下したことがうかがえる。

サハリンでは、続縄文時代前半期にあたるアニワ文化に属する動物遺存体の報告が知られていないため、当該期におけるイノシシ類利用の様相は不明である。

#### c. サハリン中部ザーパトナヤ遺跡群における遺存体(表 21)

サハリン中部では、続縄文時代前半期からオホーツク文化期前期に併行する可能性のある土器群(「ザーパトナヤ 10 タイプ土器」)の存在が認められている(Федорчук 1998)。

1991 年に発掘調査が行われたザーパトナヤ 12 遺跡では、この土器群に伴って、イノシシ類の左上顎骨 1 点が出土している。この資料は、歯の萌出状況の観察から、生後 6 ヶ月以上 18 ヶ月未満の幼獣個体と推測される(註 2)。この資料が「ザーパトナヤ 10 タイプ土器」のうち、層位学的・型式学的に細分された I~III 群(木山他 2003)のいずれに伴うか

は定かでないため、この上顎骨のより詳細な所属時期は明らかにし得ない。

サハリンは、野生イノシシの生息圏外にあたるため、この上顎骨については、本州もしくは大陸にその供給地を求めなければならない。この時期のサハリン中部では、土器や遺跡立地の類似性から、アムール河河口部との強い関係性が認められているが（デリュージン 1994、シェフコムード 2003 [2002]、木山他 2003）、その一方で、ザーパトナヤ 10 タイプ土器と続縄文文化（アニワ文化）の土器との形態的特徴における類似や（小野・天野 2002）、ザーパトナヤ 5 遺跡で北海道の白滝産と置戸産の黒曜石が出土していること（興水・野村 1990）から、サハリン南部や北海道とも何らかの関係性を有していたことが明らかである。ただし、ザーパトナヤ 10 タイプ土器が分布する時期は、本州から北海道に移入されるイノシシ類が激減する時期にあたっているため、この上顎骨が、本州からもたらされたものであるとは考え難い。アムール河河口部での動物利用の様相は不明だが、バリシヤヤ・プフタ 1 遺跡では、クマ（медведь）もしくはイノシシ/雄ブタ（кабан）形を呈するとされる石器の報告例もあり（シェフコムード 2003 [2002]）、より強い紐帯で結ばれていたアムール河流域側からイノシシ類がもたらされた可能性が高いのではなかろうか。

#### d. オホーツク文化期における遺存体（表 22、図 40）

オホーツク文化期に属するイノシシ類の遺存体は、北海道とサハリンを合わせて 30 程の遺跡から確認されている。

北海道では礼文島、利尻島を中心とする道北地域に出土例が集中し、道東部では 2 遺跡のみから出土が報告されているに過ぎない。礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）は北海道でもっとも多く遺存体が出土している遺跡であり、前期（十和田期）に利用が開始され、中期（刻文期）以降にはその数を増す傾向にある。上顎骨・下顎骨に基づいた最小個体数は、遺跡全体で幼獣 21、亜成獣 22、成獣 59 個体にもなる（大場・大井編 1981）。成獣個体の中で老獣の占める割合は高くないとされる。この遺跡では、総個体数がかなりの数に上ることや、幼獣や亜成獣の占める割合が高いこと、雌雄の個体が含まれることなどから、少なくとも刻文期以降には繁殖集団として飼養されていたと推測されている。また、四肢骨の多くが破損していることから、肉が食されるだけでなく、骨髓食も合わせて行われたとみなされている。さらに、犬歯歯槽部が破壊された例が認められることから、食料のためだけでなく、道具素材として歯牙が利用されることもあったとされる。同じ礼文島内にある遺跡では、この他にも、礼文町浜中 2 遺跡（北海道礼文町教育委員会 1992、西本編 2000、西本 2002）で、詳細未報告分も含め、十和田期から沈線文期に属する遺存体が少量ずつ出土したことが報告されている。幼獣から亜成獣、成獣までの全ての年齢段階が含まれているという。また、沈線文期に属する同香深井 6 遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）でも、全身骨が少量ずつ得られており、幼獣個体も含まれる。さらに、末期の元地期に属する同香深井 5 遺跡（北海道礼文町教育委員会 1999）でも、少量ではあるが顎骨や四肢骨が得られており、同島で、十和田期から元地期にかけて、イノシシ類の利用がな

表21 イノシシ類の遺存体と製品の出土遺跡一覧(3) ザーパトナヤ10タイプ土器期

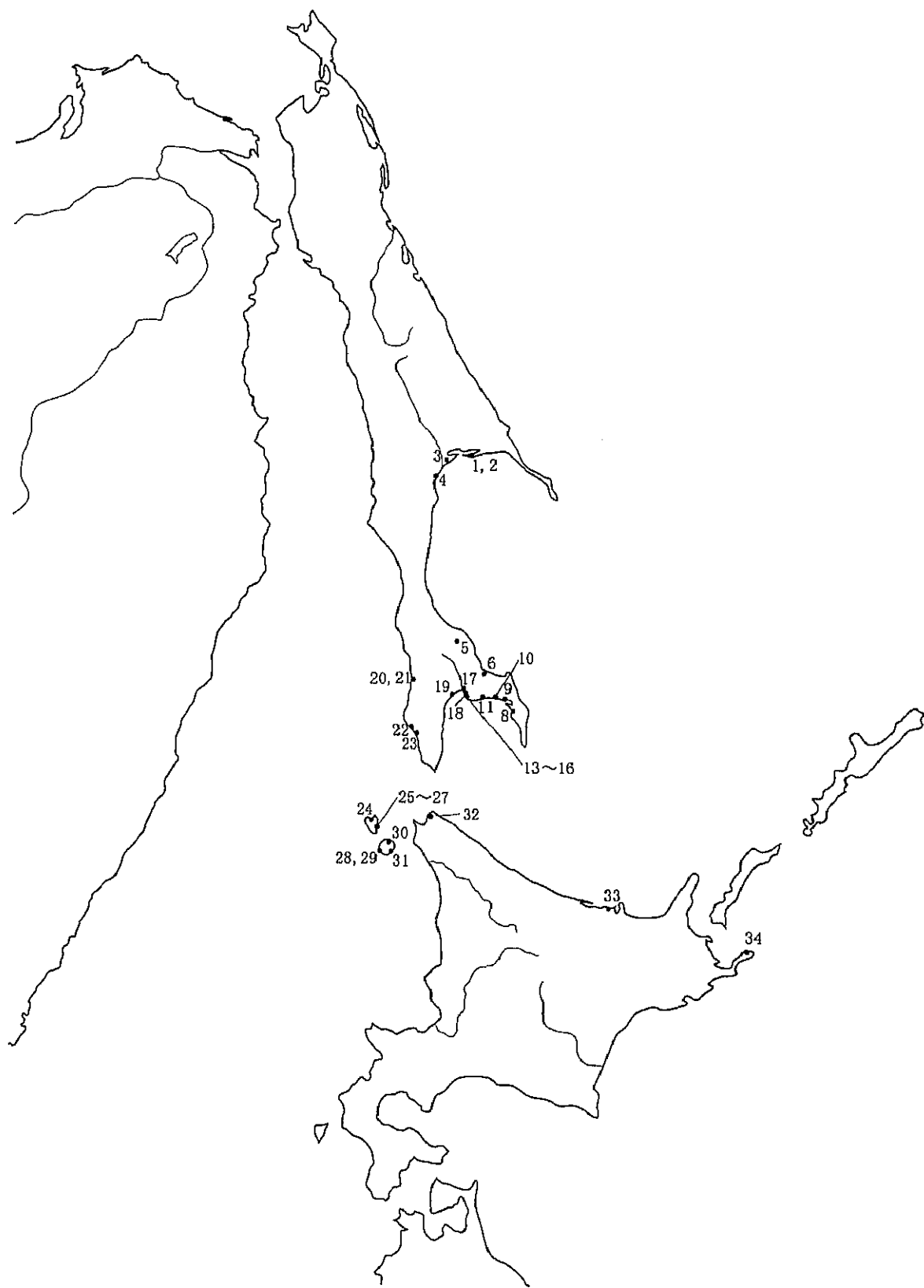
No.	遺跡名	遺存体 / 製品*		備考	出典
		続縄文 前併行	オホーツク併行 初 前		
-	ザーパトナヤ12		(△)	上顎1点のみ(匪成獣)	1

表22 イノシシ類の遺存体と製品の出土遺跡一覧(4) オホーツク文化期

No.	遺跡名	遺存体 / 製品*				備考	出典
		オホーツク					
		初	前	中	後・末		
1	プロムイソロヴォエ2(東多来加貝塚)				○		1
2	オストロブノエ2			(+)			2
3	ザーパトナヤ1				+		3
4	内路		(+)				4
5	白川小学校		(+)				5
6	オホーツコエ3				+	46号竪穴より歯(ブク?)が出土(伴出?)	6
7	近泊		(+)				7
8	内音付近		(+)				8
9	荒栗		(+)				9
10	東長浜		(+)				10
11	初子浜チャシ(ペロカーメンナヤチャシ)		(+)				11
12	布袋ノ沢		(+)				12
13	カミサンノサワ				◎		13
14	三ノ沢		(+)				14
15	三ノ沢駅通		(+)				15
16	2号沢			(+)			16
17	ススヤ(鈴谷貝塚)		(+)				17
18	ソロビョーフカ(南貝塚)			◎ / 2+			18
19	リュトガ3			◎			19
20	遠節		(◎ / 40+)				20
21	南浜通二丁目		(+ / 3)				21
22	藻白		(+)				22
23	イワノフカ		(○)				23
24	浜中2		△	△ / 1	△		24
25	香深井1		△	○ / 2	○ / 2	表土・攪乱層からも製品5点が出土	25
26	香深井5				△		26
27	香深井6				△ / 1		27
28	種屯内 筑波大調査			△	○	中期の竪穴床面で頭蓋2点出土 旧表土層からも製品1点が出土	28
	大川氏調査		(? / 1)				29
29	亦稚 利尻町教委調査		(○)		○		30
	大川氏調査				+	頭蓋(完存)1点	31
30	利尻富士町役場		△				32
31	沼浦海水浴場				△		33
32	オンコロマナイ			△			34
33	柴浦第二				△	飼養されたとは認め難い(交易品?)	35
34	オンネモト				△	飼養されたとは認め難い(交易品?)	36

\* 遺存体構の記号は哺乳類中の割合を示す 主体:◎、多い:○、少ない:△、割合不明:+、出土なし:-、出土の有無不明:?  
製品構の数字は出土点数を表す  
( )内は所属時期の断定が困難な資料である

No. : 図40の遺跡番号に対応



7, 12:位置不明

図 40 イノシシ類の遺存体とそれを素材とした製品の分布(3) オホーツク文化期

されていたことが明らかである。

利尻島でも、イノシシ類の遺存体を出土する遺跡が複数確認されている。中でも注目されるのは、利尻町種屯内遺跡（前田・西谷 1997、種屯内遺跡調査団 1998～2002、2004）において、刻文期の住居とみられる貼床面で、頭蓋骨 2 個体分が認められている点である。これらは幼獣もしくは亜成獣個体の頭蓋骨破片と亜成獣個体の頭蓋骨である。いずれも下顎骨は伴っていない。イノシシ類の頭蓋骨が住居に伴って検出される例は同文化では初見であり、類例は、オホーツク文化の展開に影響を与えたと目される大陸の靺鞨文化において多く認められている（榎本 1978）。種屯内遺跡では、沈線文期の包含層中からも、海獣類と並んで多くの遺存体を得られている。また、種屯内遺跡の南に位置する利尻町亦稚貝塚（北海道利尻町教育委員会 1978）からも、多くの遺存体が出土している。亜成獣個体が多いことから、これらの年齢段階の個体を主に食料にするという「ブタの管理が意識的に行われていた」（前掲書：91 頁）ことが推測されている。利尻島では、この他にも、利尻富士町沼浦海水浴場遺跡（山谷・内山 2004）や同役場遺跡（北海道利尻富士町教育委員会 1995）において、イノシシ類の遺存体が少量ずつ得られており、亜成獣や幼獣を含むと報告されている。

稚内市オンコロマナイ貝塚（大場・大井編 1973）では、イノシシ類の遺存体が約 20 点確認されている。四肢骨の破片が多く、骨髓食を行うために、四肢が打ち割られたものと推測されている。また、成獣のみしか出土していないことから、繁殖集団として維持していたことは想定し難いとされる。

道東部では、常呂町栄浦第二遺跡（東京大学文学部考古学研究室編 1972）と根室市オンネモト遺跡（東京教育大学文学部 1974）のみで後期の貼付浮文期に属する遺存体の出土が報告されている。出土量はそれぞれ 2 点と 1 点であり、すでに飼養されていたとは認め難いことから、交易品の一部でしかなかったのではないかと推測されている。

サハリンでは、多くの遺跡で、イノシシ類の遺存体の出土が報告されている。ただし、そのうちの半数以上は、出土層位や伴出遺物の不明な資料であり、詳細な所属時期は明らかでない。サハリン南部の日本海に面した遠節貝塚（木村 1937）でも、出土獣類に占めるイノシシ類の割合が高いと報告されているが、詳細な所属時期は不明である。しかし、近年行った踏査や試掘調査、資料分析により、サハリン南部や中部の遺跡で、所属時期の明らかでないイノシシ類の遺存体を確認されるようになってきている。このうち、中期の江ノ浦期に属するソロビョーフカ遺跡とリュトガ 3 遺跡では、獣類の中でイノシシ類が主体を占めることが明らかで、年齢構成では、ともに成獣個体が多い傾向を示していた（註 3）。また、カミサンノサワ遺跡で筆者らが行った踏査では、後・末期に属する南貝塚式土器とともに、多量のイノシシ類の遺存体を得られ、成獣を主体としていることが明らかであった（註 4）。このような成獣に偏る年齢構成が、サハリン南部の江ノ浦期以降の遺跡で普遍的にあてはまる傾向かどうかは、資料数の増加を待って検討する必要がある。サハリン中部では、後・末期の東多来加期に属するプロムィスロヴオエ 2 遺跡（東多来加貝塚）から、

イノシシ類を含めた多量の動物遺存体が得られている。このうち 1994、1995 年にフェドルチュク氏によって行われた発掘調査によって出土した動物遺存体の一部を分析したところ、イノシシ類がイヌ、アザラシに次いで多く確認され、その最小個体数は 34 個体と算出された (内山 2002a、b)。年齢構成は、幼獣 23 個体、亜成獣 6 個体、亜成獣もしくは成獣 2 個体、成獣 3 個体であり、幼獣と亜成獣がかなり高い割合を占めることが明らかであった。これは、南部でみられたイノシシ類の利用内容と大きく異なるものである。なお、サハリンでは、イノシシ類の遺存体が遺構に伴って出土する例は稀であり、その可能性のある事例は、南貝塚期に属する住居址からイノシシ類のものとみられる歯牙が出土したオホーツクエ 3 遺跡 (Шубина2002) のみである。

以上のように、オホーツク文化期に属するイノシシ類の遺存体は、サハリンから北海道北部の礼文島、利尻島を中心に確認されることが明らかであった。これらの地域では、出土獣類に占めるイノシシ類の割合の高い遺跡が多く、利用が盛んであったことがうかがえる。また、その供給地については大陸側とみなす見解が現在広く認められており、近年行われた古 mtDNA の分析 (石黒 2000、石黒他 2001、Watanobe et al.2001) でも、これを支持する結果が得られている。

## (2) 骨製品・歯牙製品

### a. 縄文時代・続縄文時代 (アニワ文化期) における製品

イノシシ類の遺存体を素材として製作された製品については、遺存体に比して注視されることが少なく、これを主体的に取り上げた論考も、虻田町入江貝塚から出土した歯牙製品の紹介 (大島・角田 1995) と筆者による北海道のイノシシ歯牙製品の検討 (内山 2003b) を除いて皆無である。

北海道において、縄文時代、続縄文時代に属するイノシシ類の骨を素材とした製品は、これまでのところ認められておらず、当該期の資料は歯牙製品に限られている (表 23)。歯牙製品は 36 例報告されており、縄文時代中期終末期に属するとされる道南部の松前町寺町貝塚 (北海道松前町教育委員会 1988) から出土した下顎切歯製の有孔品 (図 42 - 28) が最古の事例である。

縄文時代後期には、噴火湾岸の虻田町入江遺跡 (苫小牧市埋蔵文化財調査センター1990)、同入江貝塚 (北海道虻田町教育委員会 1994、大島・角田 1995、高橋 2001) を中心に、出土数の増加が認められる。出土地域は、渡島半島から噴火湾岸にかけての太平洋岸地域と、そこから少し内陸に入った千歳市の他、日本海岸に面した積丹半島の付け根にある泊村や北海道北端部の礼文島にまで及んでいる。犬歯を素材とした有孔品が主体であるが、中には、穿孔を施しただけの製品 (25) や、板状に加工した上で孔を穿った製品 (23、24、39)、さらには入江貝塚事例のように、下顎犬歯の内側縁を鋸歯状に削り、片側半分に 3ヶ所の穿孔 (うち 1 孔のみ貫通) を施した人間の歯列様の製品 (22) までのヴァリエティがみられる。また、入江遺跡や入江貝塚では、下顎犬歯製の単式釣針 2 点 (19、20) や複式

釣針の鈎部 1 点 (21) が出土しており、北海道に生息していないイノシシ類の歯牙が実用品の素材として用いられている点は注目される。なお、礼文町船泊遺跡（北海道礼文町教育委員会 2000）から出土した「器種不明品」（図 41 - 1）は、作業場と目されている堅穴住居の床面から出土したものであるという。

晩期になると出土数が減少するが、この時期に属する可能性が高いとみられる中標津町計根別桜井遺跡（大沼 1968、北地文化研究会 1971）の事例（4）によって、それまで出土例の報告のなかった道東部でも、その存在がうかがえることは重要である。この資料は、土取り作業の際にベニガラと人骨、150 個以上の貝製小玉などとともに採集されたものであり、人骨に伴う副葬品であった可能性もある。

縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭、続縄文時代前半期には、出土遺跡数が 3 遺跡と限られているが、釧路市幣舞遺跡（北海道釧路市教育委員会 1990、北海道釧路市埋蔵文化調査センター 1994、1996、1999）から一括して出土したこともあり、縄文時代後期と並んで多数の製品が確認されている。幣舞遺跡から出土した製品は、3 号貝塚からの出土品以外の全てが墓塚に伴うものであり、このうち、5～9、および 10～15 は第 88 号墓、第 89 号墓塚内において、それぞれ人骨の頸椎を取り囲むように出土したことから、3 点 1 セットの首輪として着装されていたものと推測されている。当該期の資料のうち、大半がオスの下顎犬歯を素材とした有孔品である。破損し全形が不明な資料もあるが、幣舞遺跡の 3 号貝塚からの出土品（16）と形状不明の 4 号墓出土品、及び恵山町恵山貝塚（佐藤・五十嵐 1996）で採集された製品 1 点（30）を除いて、穿孔以外に半截するなどの加工は施されていないようである。幣舞遺跡出土の動物遺存体について報告を行った金子浩昌氏（1996）は、同遺跡から出土した基部と先端部に穿孔を施しただけの有孔品について、「おそらく東北地方産のイノシシの歯が津軽、下北を経てもたらされたのであろう」（金子 1996：179 頁）と述べるとともに、「東北地方でもこのような製品の着装埋葬例は知られていないが、亀ヶ岡遺跡で同様の加工品が出土している」（前掲書：179 頁）ことを指摘している。

サハリンでは、これまでのところ、縄文時代の併行期と続縄文時代前半期（アニワ文化期）に属する出土例の報告例は認められていない。

以上のように、縄文時代と続縄文時代（アニワ文化期）においては、北海道でのみ歯牙を素材とした製品の出土を見る。このことは、北海道とサハリンに本来生息しないとされるイノシシ類の供給地が、当該期においては、本州であった可能性を裏付けるものである。北海道では、縄文時代中期末葉から歯牙製品の出土が認められるが、出土量が顕著となるのは縄文時代後期と、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭、前半期にかけてであり、晩期の製品に限られる点以外は、前述した遺存体の出土傾向とも一致する。なお、続縄文時代後半期に属する製品はこれまでのところ得られておらず、遺存体の出土例も 1 遺跡のみにとどまっていることからすれば、この時期を境に、イノシシ類に対する位置づけや供給地と目される本州との関係に変容が起こった可能性が考えられよう。



表23 イノシシ類の遺存体を素材とした製品(1) 縄文・続縄文時代

No.	遺跡名	時代	製品の概要			分類	図番号
			形態的特徴	素材 *	全長 **		
1	船泊	縄文後期	板状に整えた「器種不明」品	C(下)	25.1	I-3	図41-1
2	船泊砂丘第四	縄文後期?	縦に半裁された未製品	C(下)	(126.0)	I	2
5	種屯内	続縄文前半	有孔品	C(下・右)♂	(65)	I-1-a	3
6	計根別桜井	縄文晩期?	両端が切断された有孔品	C(下)♂	69	I-1-a	4
8	幣舞 (第41号墓)	縄文晩期末～続縄文前半	「装飾品」	C	?	I?II?	—
	(第88号墓)	続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(137)	I-1-a	5
		続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(101)	I-1-a	6
		続縄文初頭	「首輪」 組合わせて着装	C(下)	(87)	I-1-a	7
		続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(90)	I-1-a	8
		続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(39)	I-1-a	9
	(第89号墓)	続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(111)	I-1-a	10
		続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(76)	I-1-a	11
		続縄文初頭	「首輪」 組合わせて着装	C(下)	(112)	I-1-a	12
		続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(126)	I-1-a	13
		続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(112)	I-1-a	14
		続縄文初頭	「首輪」	C(下)	(114)	I-1-a	15
	(3号貝塚)	縄文晩期末～続縄文初頭	折面を丸く整形した「垂飾」	C	(32)	I?II?	図42-16
25	美々4 (呑口)	縄文後期	有孔品	C(上)	63	II-1	17
40	有珠善光寺2	縄文晩期	縦割した「刃器」	C(下)	30	I-3	18
44	入江遺跡	縄文後期	「単式釣針」	C(下)	(20)	I-2-a	19
		縄文後期	「単式釣針」	C(下)	(32)	I-2-a	20
45	入江貝塚	縄文後期	「複式釣針の針部」	C(下?)	(52)	I-2-b	21
		縄文後期	有孔品 (歯列を模倣?)	C(下・左)♂	(90.9)	I-1-c	22
		縄文後期	有孔品	C(下・右)♂	60	I-1-b	23
		縄文後期	有孔品	C(下・左)♂	(28.8)	I-1-b	24
		縄文後期	有孔品	C(下・左)♂	(61.1)	I-1-a	25
		縄文後期	未製品	C(下・左)♂	36.5	I-3	26
47	照岸洞窟	縄文後期末～晩期初頭	有孔品	C(下)先端	(22)	I-1-a	27
51	鮎川洞穴	縄文晩期	切断し両端に穿孔した有孔品	C	?	I?II?-I	—
54	寺町	縄文中期終末期	有孔品	I(下)	(58.1)	III-1	28
60	戸井	縄文後期	薄く割った「垂飾」	C(下)♂	?	I-1?	—
		縄文後期	有孔品	I(下)	40.1	III-1	29
61	恵山 (採集品)	続縄文前半?	縦に半裁した有孔品	C(下)	(61.8)	I-1-b	30
		続縄文前半?	有孔品 対になる	C(下・左)	126.5	I-1-a	31
		続縄文前半?	有孔品	C(下・右)	126.0	I-1-a	32
62	コタン温泉	縄文後期	有孔品	C(下)前面♂	(17.5)	I-1-b	33

\* アルファベットは歯牙を表す I: 切歯、C: 犬歯

上: 上顎、下: 下顎、左: 左側、右: 右側、♂: 雄

\*\* ( ) 内は残存長 (mm)

No.: 縄文時代は図38、続縄文時代は図39の遺跡番号に対応

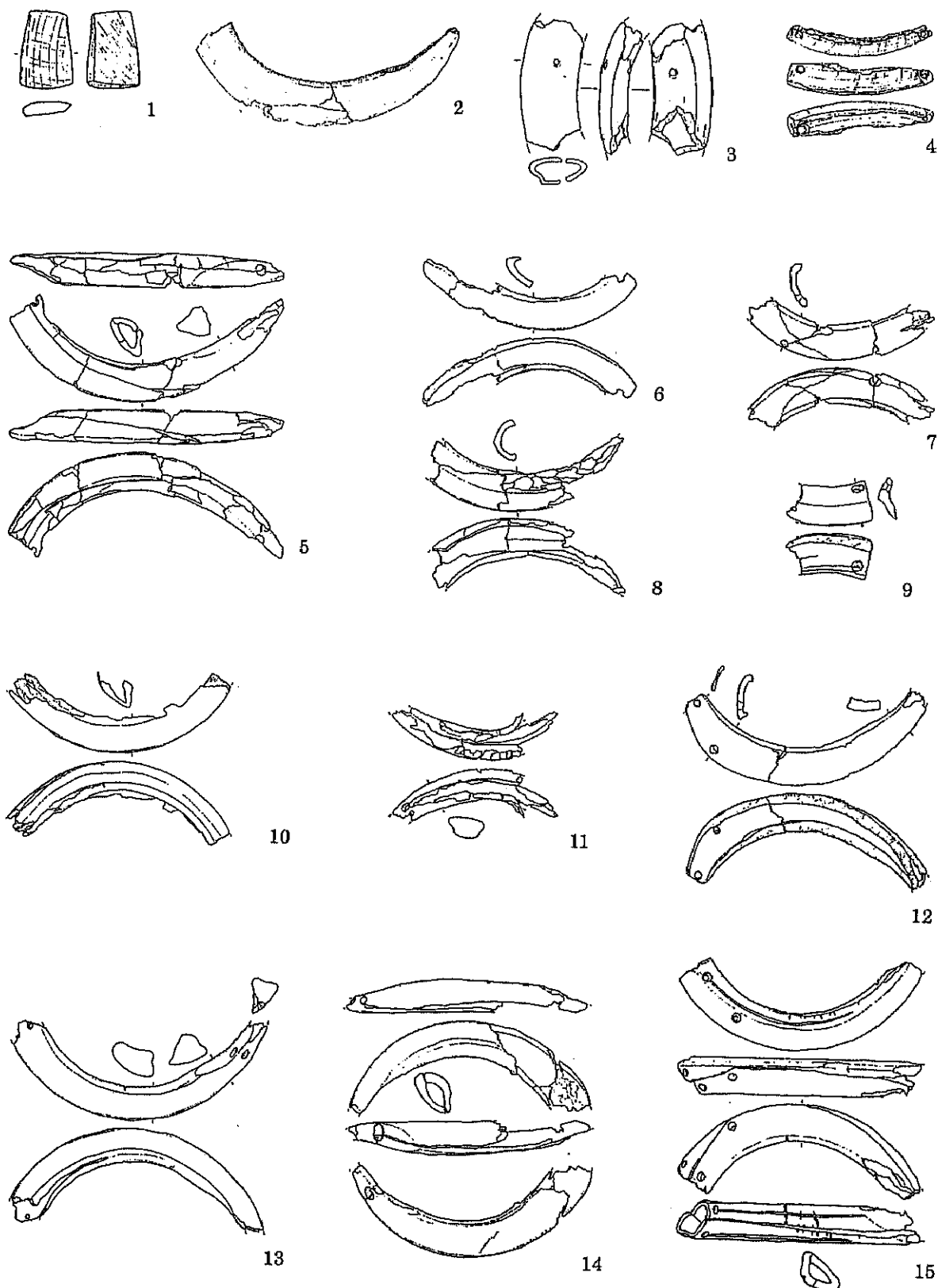


図41 イノシシ類の歯牙製品(1) 縄文・続縄文時代

1: 船泊 2: 船泊砂丘第四 3: 種屯内 4: 計根別桜井

5~15: 幣舞(5~9: 第88号墓、10~15: 第89号墓) (1のみ縮尺 1/2、その他 1/3)

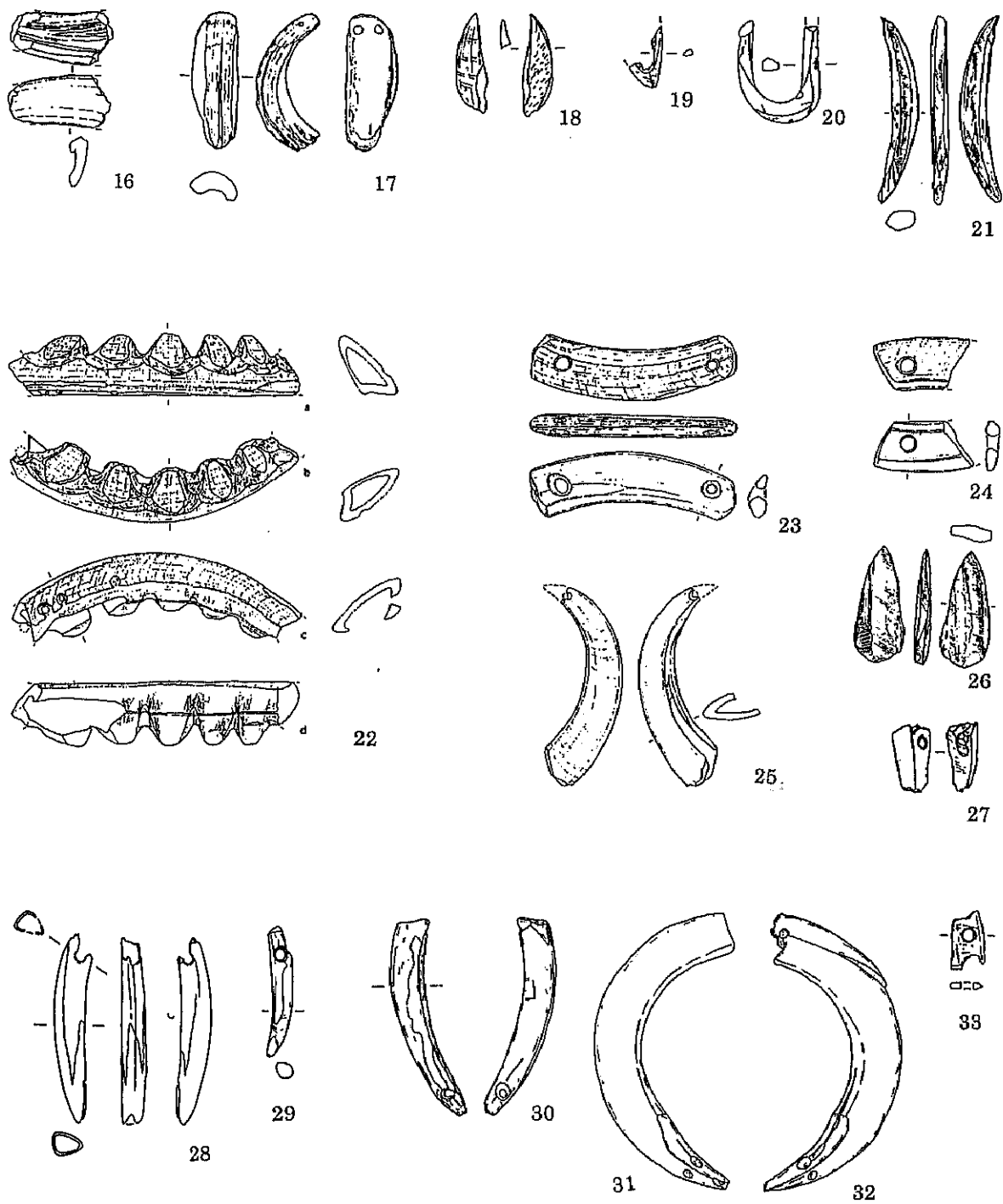


図42 イノシシ類の歯牙製品(2) 縄文・続縄文時代

16: 幣舞(3号貝塚) 17: 美々4(呑口) 18: 有珠善光寺2 19~26: 入江 27: 照岸洞窟  
 28: 寺町 29: 戸井 30~32: 恵山 33:コタン温泉 (17,31,32のみ縮尺1/3、その他1/2)

## b. 縄文時代・続縄文時代に属する歯牙製品の分類と時期的変遷

前述した出土資料の内容からも明らかなように、歯牙製品の素材としては下顎犬歯が利用される傾向が強く、全資料 36 点のうち、下顎犬歯が用いられた例は、その可能性が高い資料を含めて 30 例を占める。この他には、上顎犬歯を用いた例が 1 例、上顎か下顎いずれかの犬歯を用いた例が 3 例、下顎切歯を用いた例が 2 例確認されている。性別が報じられた 9 例はいずれも雄であり、そのうち入江貝塚出土の 1 例（図 42 - 25）は、大きさから明らかに乳歯と判断できる。日本の野生イノシシを対象とした研究によれば、乳犬歯は生後 7～8 ヶ月未満の個体ではみられるが、19～20 ヶ月の個体では永久犬歯に置き換わっているとされるため（Hayashi et al.1977）、この資料は 1.5 歳未満の雄の個体から採取された下顎犬歯を素材としたと考えられる。




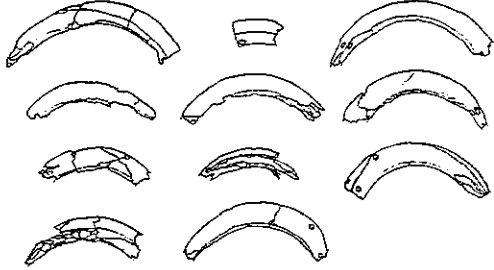
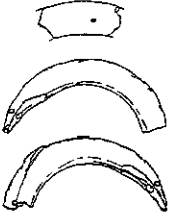

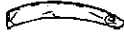







加工内容としては穿孔の施される例が圧倒的に多く、26 例を数える。これに対して、実用品と認定できる製品は釣針の 3 例しかなく、イノシシ類の歯牙が非実用品として加工される傾向にあることが明瞭に示された。表 24 は、かつて筆者が、歯牙製品の素材と加工内容に基づいて示した分類案（内山 2003b）に一部修正を加えたものである。

穿孔が施された製品（I・1-a、I・1-b、II・1、III・1 類）は、『骨角器の研究』（金子・忍沢 1986）中の「腕輪 A（半環状・組み合せ式）」や「垂飾状歯牙」に相当する。中でも、I・1-a 類として分類した一群は、幣舞遺跡（北海道釧路市教育委員会 1990、北海道釧路市埋蔵文化調査センター 1994、1996、1999）で多量に出土したこともあり、高い割合を占める。『骨角器の研究』によれば、I・1-a 類のような下顎犬歯をほぼ全形のまま用いる例は、沖縄地方で多く見られるが、その他の地域では少ないとされる。前述したように、亀ヶ岡遺跡で同様の加工品が出土しているとの指摘もあるが、イノシシ類の供給地と目される本州で類例が限られることになれば、供給地からは製品としてではなく、未加工の状態歯牙が渡り、北海道内で加工が施された可能性が想定し得ることとなる。

つづいて、歯牙製品の時期的変遷についてみていきたい。図 43 は所属時代別・分類タイプ別に製品を並べたものである。この図から明らかなように、縄文時代晩期までは、下顎犬歯を素材とする点以外に共通した傾向は認め難く、形態的にかなりのヴァリエティが生

表24 イノシシ類の歯牙を素材とする製品の分類

- I 犬歯(下顎)製
  - 1 有孔品
    - a 犬歯を立体的な形状のまま利用し穿孔を施す
    - b 犬歯を裁断し板状にした上で穿孔を施す
  - 2 釣針
    - a 単式釣針
    - b 複式釣針の鈎部
  - 3 その他(未製品を含む可能性がある)
- II 犬歯(上顎)製
  - 1 有孔品
- III 切歯(下顎)製
  - 1 有孔品

		縄文中期末	縄文後期	縄文後期末～ 晩期初頭	縄文晩期	縄文晩期末～続縄文初頭	続縄文前半
I	a						
	b						
	a						
2	b						
	3						
II	1						
III	1						

製品の縮尺不同

図43 イノシシ歯牙製品の時代的変遷 (縄文時代・続縄文時代)

じている。それに対し、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭、続縄文時代前半期にかけては、I・1-a 類が圧倒的多数を占める。このうちの大半は幣舞遺跡（北海道釧路市教育委員会 1990、北海道釧路市埋蔵文化調査センター1994、1996、1999）の資料であるが、距離的に離れた恵山町恵山貝塚（佐藤・五十嵐 1996）や利尻町種屯内遺跡（前田・西谷 1997、種屯内遺跡調査団 1998～2002、2004）でも類似した形状の資料が得られていることは興味深い。この時期は、北海道で地域分化が顕著となる段階にあたるが、その一方で、地域文化圏を超えた関係性が認められることを、この歯牙製品から読み取ることができる。

### c. オホーツク文化期における製品

オホーツク文化期に属するイノシシ類の遺存体を素材とした製品は少ない（表 25）。

北海道では、礼文島と利尻島に所在する遺跡のみから、この種の製品が得られている。礼文町浜中 2 遺跡（北海道礼文町教育委員会 1992）では、イノシシ類の腓骨の一端を尖らせた刺突具（図 44 - 3）が出土している。刻文期に属する資料である。同じ礼文町に所在する香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）では、表土層や攪乱層を含めて、9 点もの製品が得られている。この内訳は、犬歯や切歯に穿孔した「垂飾」4 点（5、8、11、12）、脛骨（イノシシ類？）や橈骨の一部を尖らせた「錐」2 点（6、7）、犬歯や切歯を素材とした「釣針鈎」3 点（4、9、10）である。形態的特徴や所属時期などに規則性は認められない。礼文町香深井 6 遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）では、加工途中の下顎犬歯 1 点がみられる。沈線文期に属する資料である。利尻町種屯内遺跡（種屯内遺跡調査団 1999）では、下顎犬歯製の釣針鈎部とみられる品（13）が出土している。旧表土層より得られたものであり、所属時期は不明だが、イノシシ類の遺存体を多く出土するオホーツク文化期の所産である可能性が高い。同遺跡では、大川清氏によって行われた調査においても、イノシシ類の歯牙を素材とした釣針鈎部とみられる製品（14）が出土している（大川 1998）。

オホーツク文化期には、サハリンでも、イノシシ類の遺存体を素材とした製品の報告が認められるようになる。アニワ湾に面したソロビョーフカ遺跡からは、下顎犬歯製の釣針鈎部が出土している（註 5）。全形をほぼそのまま利用したものであり、先端部には僅かにアグが作出されている。詳細な所属時期は不明である。また、サハリン南部西岸に位置する遠節貝塚からは、イノシシ類の歯牙に穿孔を施した製品 40 点余りが出土しているとされる（木村 1937）。伴出遺物や出土層位の記載がないため、所属時期は不明だが、これらの有孔品はイノシシ類の遺存体とともに出土すると報告されていることから、遺存体を多く出土することで知られるオホーツク文化期の所産である可能性が高い。遠節貝塚の南に位置する南浜通二丁目貝塚からも、出土「牙器」の項目の中で、イノシシ類の下顎犬歯（1）が紹介されている。先端と基部を欠いており、使用程度は不明とされる。未加工品である可能性もある。また、遺跡名は不明だが、大沢付近の貝塚から出土したとされる下顎犬歯製の有孔品（2）が 1 点みられる（犬飼 1960）。犬飼哲夫氏はこれを「野猪の牙」として報告している。先端から 3cm 程の所と基部の 2 ヶ所に孔が穿たれている。所属時期は明らかで

はない。

以上、通観してきた内容から明らかなように、オホーツク文化期において、イノシシ類の遺存体を素材とした製品は少ない。また、縄文時代や続縄文時代において明瞭であった素材の選択性や器種における規則性なども認められない。ただし、仮に、遠節貝塚から出土した歯牙製の有孔品40点以上がオホーツク文化期の所産であるとするならば、一部の遺跡に限って、歯牙を有孔品として利用するという定形化された利用が想定し得ることになる。しかし、当文化圏の大半では、例えばイノシシ類が出土獣類の主体を占める遺跡であっても、その遺存体を道具素材として利用することは稀であったとみなすことができよう。

表25 イノシシ類の遺存体を素材とした製品(2) オホーツク文化期

No.	遺跡名	時代	製品の概要			図番号
			形態的特徴	素材	全長*	
18	ソロビョーフカ(南貝塚)	オホーツク	鈎針鈎	C(下)	(71)	—
20	遠節	オホーツク?	有孔品(40個+)	歯牙	?	—
21	南浜通二丁目	オホーツク	未製品?未加工品?	C(下)	(73)	図44・1
-	(大沢付近)	オホーツク?	有孔品	C(下)	(80)	2
24	浜中2	オホーツク中期	刺突具	腓骨	75	3
25	香深井1(表土)	オホーツク	「鈎針鈎」	C(下・左)♀	(37)	4
		オホーツク	「垂飾?」	C(上・左)♂	60	5
		オホーツク	「錐」	イノシシ類?脛骨	81	6
		オホーツク	「錐」	機骨(上・左)	55	7
		オホーツク	「垂飾」	I(右)	(58)	8
		オホーツク後期	「鈎針鈎」	I(右)	57	9
		オホーツク後期	「鈎針鈎」未製品	C(下)	(39)	10
		オホーツク中期	「垂飾」未製品?	C(下)♀	(39)	11
27	香深井6	オホーツク中期	「垂飾」	C♂	67	12
		オホーツク後期	未製品	C(下)♂	—	—
28	種屯内(旧表土)	続縄文?オホーツク?	「鈎針鈎?」	C(下)	32.0	13
		続縄文?オホーツク?	「鈎針鈎」	歯牙	58	14

\* アルファベットは歯牙を表す I: 切歯、C: 犬歯

上: 上顎、下: 下顎、右: 右側、左: 左側、♂: 雄、♀: 雌

\*\* ( ) 内は残存長(mm)

No. : 図40の遺跡番号に対応



図 44 イノシシ類の遺存体を素材とした製品 (オホーツク文化期)

1: 南浜通二丁目貝塚 (サハリン) 2: (大沢付近) (サハリン)

3: 浜中 2 遺跡 4~12: 香深井 1 遺跡 13,14: 種屯内遺跡 (縮尺 1/2)



### (3) イノシシ類を模った遺物

北海道、サハリンにおいて、イノシシ類を意匠した遺物の出土例は、縄文時代、続縄文時代、オホーツク文化期を通じて少ない（表 35～39：第 6 章に掲載）。

縄文時代、続縄文時代において、確実にイノシシ類を意匠したといえる遺物は、恵山町日ノ浜遺跡（犬飼 1960）から出土した土製品（図 60 - 1：第 6 章に掲載）1 例のみに限られる。縄文時代晩期に属するもので、竪穴住居址から出土したとされる。この土製品はイノシシ類の全身を表しており、体部にひかれた横線 6 本は、幼獣にとっての保護色である縞模様を表現したものとみられている。この他にも、伊達市有珠 10 遺跡（北海道伊達市教育委員会 2003）から出土した角製の動物意匠（図 63 - 44）や角製匙の先端部に作出された動物意匠（48）、江別市高砂遺跡（北海道江別市教育委員会 2000）から出土した石製の動物意匠（図 62 - 39）に対して、イノシシ類、もしくはクマとイノシシ類の特徴を併せ持つ可能性が指摘されている（北海道伊達市教育委員会 1994b、畑 2004）。前者 2 例は続縄文時代前半期、後者は続縄文時代初頭に属する資料である。筆者はこれら全てについてクマを模した可能性が高いと考えているが、仮にこれらをイノシシ類の意匠遺物に含めたとしてもなお、縄文時代、続縄文時代におけるイノシシ類の意匠遺物が限られている点は注目されよう。これは、イノシシ類の意匠遺物を数多く出土している本州の東北地方（斎野 1999）との明瞭な相違点である。

オホーツク文化期において、確実にイノシシ類を意匠したといえる遺物は出土していない。イノシシ類の可能性が指摘されているのは、サハリン南部のアニワ湾岸に位置するススヤ遺跡（鈴谷貝塚）出土の針入れ（図 65 - 6）（坪井 1908、馬場 1940）である。この資料には、線刻によって 2 個体の動物が向かい合わせに表現されており、馬場脩氏（1940）はトドかイノシシではないかと推測している。しかし、かなりデフォルメされた意匠であるため、対象となった動物種の認定は困難である。また、サハリン南部西岸に位置するイワノフカ遺跡（ゴルブノフ 1995、Горубнов1996、Gorbunov・Amano2002）でも、イノシシ類の可能性があるとされる動物意匠が出土している（図 67 - 54、55）。オホーツク文化期に属するものとされ、同遺跡から出土した木製の投擲具の<sup>14</sup>C年代測定でも1280±100B.P.という値が得られている（Горубнов1996）。ただし、これらの動物意匠は、民族誌時代の北東アジアに広く見られるクマの木偶（イノカ）とも類似しており、また、発掘調査についての詳細な報告も行われていないことから、現段階でオホーツク文化期の資料とみなすには疑問もある。これらの資料のうち、大半が木製品であるが、骨製品も含まれるという（ゴルブノフ 1995）。サイズは5～7cmのものが多いが、15cm以上のものもある。報告者のゴルブノフ氏は同遺跡で多量のイノシシ類の遺存体が得られていることから（Арексеева・Голубнова1993）、これを「ブタ」とみなしているが（ゴルブノフ 1995）、その形態的特徴からすれば、クマを模った製品である可能性も十分に考えられよう。

### 第3節 縄文時代、続縄文時代におけるイノシシ類利用

前節に整理した各種遺物の出土傾向から、イノシシ類の利用については、(1)縄文時代後・晩期をピークとする縄文時代から続縄文時代にかけての時期と、(2)オホーツク文化期、との間に大きな画期を見出すことができる。このうち本節では、(1)の縄文時代、続縄文時代に認められたイノシシ類の利用内容の時期的変遷や地域差、供給地と目される本州との関わり、同文化内での地域間関係、飼養の有無やその程度について検討を試みることにする。

#### (1) 利用内容の時期的変遷と地域差

イノシシ類が、その本来の生息圏から外れた北海道で、縄文時代後・晩期を中心に多量の出土をみたことは、前節に通観したとおりである。

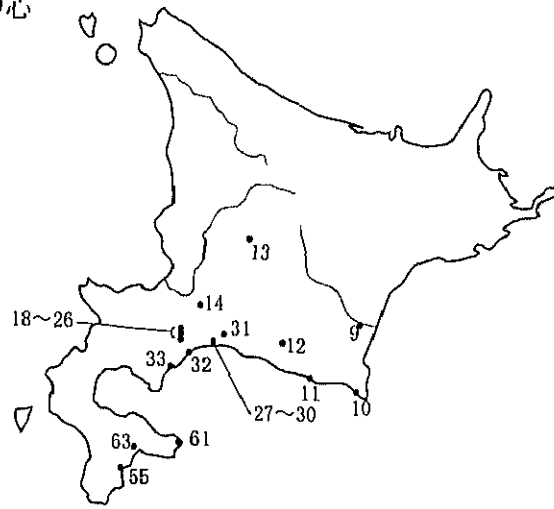
イノシシ類を利用した遺跡は、遺存体の出土内容から、①被熱した遺存体を中心とする遺跡と、②被熱しない遺存体を中心とする遺跡、とに大きく分けることができる。ここに、歯牙を素材とした製品の出土傾向を加味すると、その大半が、②の遺跡において出土していることが明らかであり、また、③歯牙製品や歯牙のみが他の遺存体を伴わずに単独で出土している遺跡もみられる。

①のように、被熱した遺存体が高い割合を占める遺跡(図45)では、イノシシ類以外の動物の多くも火を受けており、中には焼人骨が認められる遺跡もある。また、その出土地点が、祭祀的な意味合いの強い盛土遺構や焼土、墓である例が多いことから、火を用いた儀礼が行われ、その中でイノシシ類が被熱するに至ったものと解釈できる。本州ではイノシシ類を伴う儀礼を「狩猟儀礼」と位置づけているが(土肥1985)、イノシシ類の生息圏外である北海道では、儀礼の本来の意味が異なるものとみなせる。なお、この問題は、狩猟儀礼に関わるといわれるイノシシを模った意匠遺物(土肥1981)が東北地方で数多く出土しているのに対し(斎野1999)、北海道では恵山町日ノ浜例(犬飼1960)のみに限られることとも関連しよう。これらの遺跡は、縄文時代後期には、石狩低地帯を中心に分布し、晩期になると、これに加えて太平洋岸の苫小牧市や日高、十勝方面、さらに内陸の上川方面でも出土が報告されるようになる。その後、続縄文時代になると、①の遺跡は急激に減少する傾向を示す。

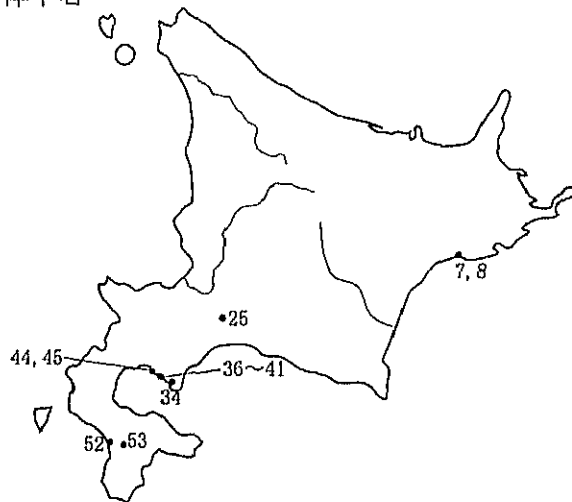
一方、②のように、被熱していない遺存体を中心とする遺跡(図45)は、縄文時代後期に渡島半島沿岸部から内浦湾岸を中心に分布しており、晩期には、渡島半島沿岸部で数を減ずるが、内浦湾岸では引き続き出土を見る。さらに、この時期には、道東部の遺跡でも出土が確認されるようになる。縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭、続縄文時代前半期にも、数は少ないが、内浦湾岸や道東部の太平洋岸で出土が報告されている。②として分類された遺跡の中には、顎骨の出土量が四肢骨より多いとされる遺跡も含まれており、歯牙製品の出土が多いことを考え合わせると示唆的である。

③の歯牙製品や歯牙が単独で出土する遺跡(図45)は、縄文時代中期からみられ、後期

①被熱した遺存体中心



②被熱しない遺存体中心



③歯牙・歯牙製品のみ

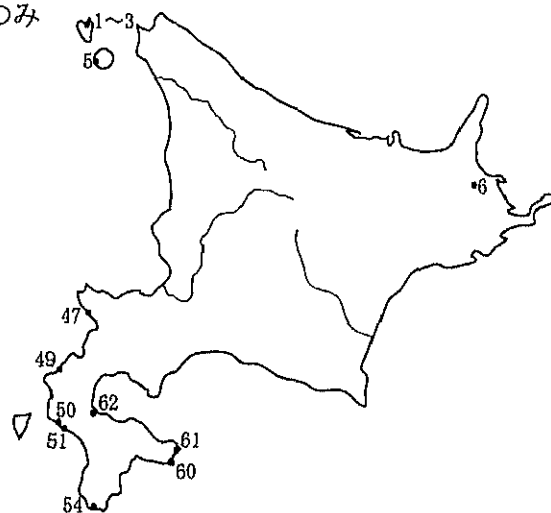


図 45 イノシシ類の出土内容別分布 (縄文・続縄文時代)

には渡島半島沿岸部と礼文島、また、後期から晩期にかけては渡島半島沿岸部と道東部、晩期には道東部、さらに続縄文時代には渡島半島沿岸部と利尻島において、その可能性のある遺跡が確認されている。遺跡数は①や②に比べて限られており、また、この中には動物遺存体の内容が報告されていない遺跡もあるため、本来は②に属する遺跡が含まれている可能性もある。

## (2) 地域差に見る本州との関わり

①～③の遺跡の大半は、縄文時代、続縄文時代を通じて、北海道の南半部に分布が偏ることが明らかである。これと合わせて、前節で取り上げた古 mtDNA 分析の結果から見ても、これらの供給元が本州であった可能性が高いといえよう。このようなイノシシ類の空間的偏在は、供給地と目される本州からイノシシ類が移入される程度に道内で地域差のあったことを示しており、本州から空間的距離のある道東部オホーツク海岸や道北部では、一般にイノシシ類の利用価値が薄れていたことが分かる。ただし、道北端部に位置する礼文島では、後期にイノシシ類の歯牙製品や歯牙が確認されており、それらは、渡島半島の土器と形式的に一致する磨消縄文系土器や南海産の貝製品（福田・前田 1998）とともに、日本海を舞台とした交流活動の中でもたらされたものとみなせる。

また、①～③の遺跡は、前述したように、分布上に明らかなずれが認められることから、北海道内において、イノシシ類の利用内容が一様でなかったことが見て取れる。つまり、①のような石狩低地帯を中心とする地域では、イノシシ類を移入し、最終的には儀礼の一環として他の動物とともに焼くという行為を行っている。一方、②のような渡島半島から内浦湾にかけての沿岸部や道東部を中心とする地域では、動物を焼くという儀礼行為自体が①の地域ほど盛んではなく、イノシシ類の歯牙を道具素材として用いる傾向が強い。②の遺跡の中には、歯牙を伴う顎骨の割合が四肢骨よりも高いとされる遺跡が含まれていることから、その部分を特に選択して入手していた可能性も考えられる。①、②の遺跡はともに、食料資源としてイノシシ類を利用した可能性があるが、移入した第一の目的が何であったのかは判断し難い。以上のことを総合して考えれば、本州からイノシシ類がもたらされるルートは複数あり、移入された地域で、それぞれの目的に沿ったイノシシ類の利用がなされていたものと考えられる。ただし、イノシシ類の遺存体を多量に出土する遺跡の中には、苫小牧市柏原 5 遺跡（苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター 1997）のように、顎骨が出土していても犬歯や歯牙製品の出土が認められない遺跡もあるため、イノシシ類が道内で再分配された可能性も考慮しなければならない。③のような歯牙製品や歯牙が単独で出土する遺跡や、①や②の中で遺存体の出土量が少ない遺跡などは、そのような再分配の中で、イノシシ類を入手した可能性もある。なお、②では、晩期に内浦湾岸と道東部とに分布域が離れて存在しているように見えるが、道東部では、道南部に分布する日ノ浜式土器や本州に特徴的な独鈷石などが出土することが知られており（沢 1969）、さらに、当該期に大洞系土器が分布域を拡大することからすれば（杉浦 2001、福田 2003）、

道東部には、イノシシ類が本州から直接移入されたか、もしくは道南部を介して移入が図られた可能性が考えられる。

### (3) 飼養の有無

縄文時代から続縄文時代にかけて出土したイノシシ類については、その多量な出土量から、一時期、もしくは複数世代において道内で飼養された可能性を指摘する見解がある(西本 1985、(財)北海道埋蔵文化財センター1997、1998a)。ただし、イノシシ類の出土が、本州との関わりの深い縄文時代後・晩期をピークとし、その後、北海道が「北の文化」(藤本 1982: 4 頁)としての独自性を強める続縄文時代に入って急激に減少する傾向を示すことからすれば、道内で繁殖集団としての安定的な維持は成し得なかったとみなすことができよう。すなわち、第 2 章で示した人間との相互関係においては、イノシシ類が生存した状態で道内に移入されたことを仮定したとしても、一時的な飼養を伴う I-b 段階にとどまるものであったとみられる。なお、ここで仮定した道内での一時的な飼養は、供給地と目される本州で、①イノシシ類が飼養されていたか、もしくは、②野生イノシシを生け捕りにする猟が行われたことを前提とする。このうち、①の縄文時代のイノシシ類飼養については、これまでもさまざまな見解が出されているが(小野 1984)、先史時代におけるイノシシ類飼養の問題は、後続する弥生時代を含めても決着をみていない(西本 1991、1993、姉崎 1999、西中川 1999、小沢 2000、松井他 2001、石黒他 2001 など)。また、②の対象獣を殺さない猟は、通常の猟とは異なる狩猟技術を要したはずであり、道具類や狩猟方法(陥穴(註 6)を利用するなど)を工夫するか、幼獣の生け捕りを目的に親子連れを狙う、などの猟が意識的に行われたことを想定しなければならない。しかし、管見の限り、現段階でそのような事例は報告されておらず、本州側での体系的なイノシシ類の飼養や生け捕り猟が確認できない以上、イノシシ類が生存した状態で道内へ持ち込まれたことを論証するのは困難と言わざるを得ない。よって、縄文時代から続縄文時代にかけて北海道で出土したイノシシ類の多くは、道内で体系的に飼養されたものではなく、本州から遺体として持ち込まれた可能性を考えなければならない。なお、このように死亡した個体を道内に持ち込んだのであれば、それを食料資源として利用するためには、死後あまり時間を経ずに持ち込まれたか、もしくはある程度保存がきくように加工された上で持ち込まれたものと考えられる。この場合は、体の小さな幼獣を除いて、全身が持ち込まれないことが多いとみられるが、北海道で出土するイノシシ類の多くが被熱のために破砕しているため、部位の偏りについては不明な部分が多く、これ以上の検討は困難である。

## 第 4 節 オホーツク文化期におけるイノシシ類利用

前節で述べたように、イノシシ類の生息圏外にあたるサハリンと北海道でのイノシシ

類利用は、(1)縄文時代から続縄文時代にかけての時期と、(2)オホーツク文化期、との間に大きな画期を認めることができる。本節では、(2)のオホーツク文化期におけるイノシシ類の系統や利用内容の時期的変遷、地域差、供給地と目される周辺地域との関わり、同文化内での地域間関係、飼養の有無やその程度について検討を試みることにする。

### (1) イノシシ類の系統

イノシシ類の遺存体がオホーツク文化期の遺跡から出土することについては古くから知られていたが、サハリンや北海道はイノシシ類の生息圏外であるために、その遺存体が、①野生イノシシがかつてこの地に生息していたことを示すものであるのか、②家畜化された「ブタ」が存在したことの証左となるのか、意見が分かれていた(平井 1965)。これについて動物学者である高橋多蔵氏が野生イノシシの存在を主張したのに対して、直良信夫氏は、頭蓋骨と下顎骨、犬歯の形態的特徴の分析に基づいて、これらが「満鮮の黒毛の豚と何ら異なる所がなく、(中略)之を猪と見る據點は少しも發見せられない」(直良 1937: 26、27 頁)と述べ、「此の豚は満鮮支の黒毛の半野生支那豚の系統であつて、日本産猪を馴化して豚としたものでもなく、又シベリアの猪を豚化したものではなかつた」(28 頁)と主張した。さらに直良氏は、これらを「恐らく當時の樺太貝塚人が沿海州、アムールランドを経て満鮮地方より輸入し、移入後地域的に獨特の發達を遂げたもの」(27 頁)と評価し、「半野性的に飼育せられていたと解される豚」(26 頁)として、新たな学名 *Sus inoi* を与えるとともに、和名を「カラフト豚」と命名した。現在、この学名は認定されてはいないが、和名は通称として同文化研究の中で多く用いられている。

現在では、オホーツク文化期に属するイノシシ類が大陸からもたらされたものであるという見解が広く認められている。これは、大陸の諸文化で古くからイノシシ類の飼養が行われていることや、大陸からさまざまな文化要素がオホーツク文化にもたらされていることから論証できる。また、近年には、礼文町香深井 1 遺跡の IV 層(十和田期～刻文期)、III 層(刻文期)、III<sub>0</sub> 層(刻文期)、II 層(刻文期～沈線文期)、I 層(沈線文期)から出土したイノシシ類や、サハリンのソロビョーフカ遺跡(江ノ浦期?)から出土したイノシシ類を対象として、古 mtDNA の分析が試みられている(石黒 2000、石黒他 2001、Watanobe et al. 2001)。その結果、香深井 1 遺跡のイノシシ類からは、少なくとも 9 種類のハプロタイプが検出され、大きく 4 系統に分類されることが明らかとなった。このことから、沿海州からサハリンを経由して、少なくとも 4 回、遺伝的に系統の異なるイノシシ類が時間的間隔をおいて移入された可能性が示されることとなった。さらに、複数の堆積層で同じハプロタイプを持つ資料も認められていることから、イノシシ類が長期間飼養された可能性も合わせて指摘されている。

### (2) 利用内容の時期的変遷と地域差

オホーツク文化期の遺跡では、これまでのところ、初期の鈴谷期に属するイノシシ類の

出土が確認されていないため、その利用は前期の十和田期に始まったものとみられている。十和田期の資料は、サハリンで所属時期不明の資料が多いこともあり、検出遺跡数自体が少なく、一遺跡からの出土量もそれほど多いものではない。つづく中期の刻文期、江ノ浦期になると、一部地域でイノシシ類が多量に出土する遺跡が確認されるようになる。特に、サハリン南部では、ソロビョーフカ遺跡やリュトガ3遺跡（註7）のように、イノシシ類が獣類の主体を占める遺跡が近年新たに見出されており、後・末期の南貝塚期や東多来加期にも、サハリンの南部や中部に位置するカミサンノサワ遺跡（註8）やプロムイスロヴォエ2遺跡（内山2000a, b）で、イノシシ類の利用が盛んであったことが明らかとなっている。また、明確な所属時期は不明だが、サハリン南部のイワノフカ遺跡では、イノシシ類が出土獣類の主体を占めることが報告されている（Арексеева・Голубнова1993）。一方、北海道では、礼文島や利尻島でイノシシ類が多く確認されているが、北海道本島では、その出土が報告されている遺跡はわずか3遺跡にとどまる。道東部に位置する常呂町栄浦第二遺跡（東京大学文学部考古学研究室編1972）や根室市オンネモト遺跡（東京教育大学文学部1974）では、それぞれ2点、1点が出土しているのみであることから、報告書中には、交易品として体の一部が渡ったに過ぎないとの可能性が述べられている。

これらオホーツク文化期に属するイノシシ類の大半は、廃棄された動物骨の堆積中に散在して検出されるなど、食用の跡とみられる例で占められている。また、四肢骨や頭蓋骨が破砕された資料が多いことから、肉だけでなく、骨髄や脳の利用も合わせて行われていたことが分かる。皮が採取されていた可能性も十分に考えられるが、それを証明するための傷の報告例がないため、推測の域をでない。

イノシシ類を出土する遺跡は、その年齢構成から、①幼獣、亜成獣個体に偏る遺跡（プロムイスロヴォエ2遺跡、イワノフカ遺跡）と、②成獣個体に偏る遺跡（ソロビョーフカ遺跡、リュトガ3遺跡、カミサンノサワ遺跡）、③幼獣から亜成獣、成獣があまり偏りなく出土している遺跡（香深井1遺跡）、とに分けることができる。これらの遺跡ではいずれも老獣の占める割合が低いとされる。このうち、①が肉質を、②が肉量をそれぞれ求めた結果だと仮定すれば、目的に応じた利用段階の規格化が遺跡ごとに進んでいたことを示す証左となり得る。また、③も、香深井1遺跡で、成長した個体では雄が少なく、雌が多いとされることから（大場・大井編1976、1981）、繁殖を視野に入れた規格的な利用が行われていたことをうかがわせる。

以上のように、オホーツク文化期のイノシシ類は、(1)生息圏外で出土していることや、(2)時代を経るにつれてその出土割合が高まること、(3)規格化された利用が想定し得ることなど、第2章で示した家畜化の傍証となる特徴が複数の項目で認められる。そのため、少なくとも中期の刻文期、江ノ浦期以降には、イノシシ類を繁殖集団として維持した遺跡が出現したとみなすことができよう。このことは、供給地と目される大陸で古くからイノシシ類の飼養が普及していることや、前述した古mtDNA分析で同じハプロタイプを持つ資料が複数の堆積層で認められたことから類推し得るものである。このように、刻文期、

江ノ浦期以降のイノシシ類は、人間との相互関係において、複数世代にわたる所有意識があり、かつ生存状態での拘束を伴うⅡ・b 段階に位置づけられる可能性が高い。ただし、古 mtDNA 分析によって、香深井 1 遺跡でイノシシ類の複数回にわたる移入が想定されているように（石黒 2000、石黒他 2001、Watanobe et al.2001）、断続的な移入無しにはその維持が困難であった可能性が考えられる。第 2 章で示したように、家畜化があるレベル以上の効率と安定性を生み出すようになった後に、それを手放す例は稀であるという（スミス 1986）。そのため、オホーツク文化が終焉して以降に、サハリンと北海道でイノシシ類の存在がほとんど認められなくなることは、その飼養がこの地域で定着しなかったことを示唆する（註 9）。なお、刻文期、江ノ浦期以降には、特にサハリンでイノシシ類の利用が盛行するため、北海道へは、サハリンで繁殖された個体が持ち込まれた可能性も考慮する必要がある。また、北海道本島ではイノシシ類の出土遺跡数と出土量がともに限られるため、すでに指摘されているように、生体としてのイノシシ類の持ち込みはなかったものとみられる（東京大学文学部考古学研究室編 1972、東京教育大学文学部 1974）。ここで出土するイノシシ類の大半は四肢骨を中心とした部位に偏るため、大陸もしくはオホーツク文化圏内の地域から、枝肉として持ち込まれた可能性が想定できよう。なお、その際には、ある程度保存がきくように乾燥などによる加工が施されていたか、もしくは戸外に置くことで自然に冷凍保存される冬季が選ばれた可能性が考えられる。

### （3）周辺文化との関わり

オホーツク文化期に属するイノシシ類の中では、これまでのところ、礼文町香深井 1 遺跡の魚骨層 V 層から出土した資料が最古の事例である。この層で出土した十和田式土器は刺突文が優勢であるため、十和田期の中でも新しい段階に位置づけられることが明らかである（天野 1998）。オホーツク文化期に属するイノシシ類は、前述したように、大陸から持ち込まれたものとみられるため、利用開始期にあたる十和田期新段階のイノシシ類は、併行期に大陸にあった靺鞨文化の初期（白杵勲氏（2004）による同仁系統土器第 1 期）やポリツェ文化（表 1）などとの関係を通じて入手された可能性が高い（註 10）。

靺鞨文化の初期に属する羅北団結遺跡の 1 号墓址と 7 号墓址では、イノシシ類の頭部が副葬されている（黒竜江省文物考古研究所 1989）。また、ポリツェ文化に属するポリツェ 1 遺跡の第 4 号住居址からは飼養されたイノシシ類の下顎骨がウマとともに出土している（Деревянко1973、2000）。さらに、同文化ではイノシシ類の土製品（Деревянко2000）も認められている。ポリツェ文化に先行するウリル文化でもイノシシ類の利用が知られており、住居址からの出土例もみられる（Деревянко1973）。このような大陸でのイノシシ類利用の様子は文献史料にも認められ、『魏志』の東夷伝には、漢・魏代に中国東北地方東部に住んだ挹婁がイノシシ類を盛んに飼養し、その肉を食し、皮を衣類とし、さらに冬には防寒のためにその脂肪を体に塗ったことが記されている（三上 1966）。さらに、『魏書』の勿吉についての項の中にも、イノシシ類が多く利用され、その皮が衣類として加工された



ことが描写されている（神田訳注 1971）。

以上のように、古くからイノシシ類が利用されてきた大陸との関わりを通じて、オホーツク文化期にイノシシ類の移入が図られたことは明らかである。なお、イノシシ類は、大陸からもたらされた大陸系遺物（菊池 1976、山田他 1995、高島 1998）の中でも、その出現が古く、北海道に限ってみれば、金属器の模倣品を含めても、もっとも古く位置づけられる資料である。

中期の刻文期、江ノ浦期になるとイノシシ類の出土量は増すが、これは当該期に増加する大陸系遺物（菊池 1976、山田他 1995、高島 1998）とともに、靺鞨文化との関係の中で取り入れられたものとみなせる。靺鞨文化では、イノシシ類が盛んに飼養されていたことが前述した出土資料や文献史料から明らかであり、さらに、住居址や墓からの出土例が多いことから、特異に取り扱われる対象であったとみられている（榎本 1978）。一方、オホーツク文化期に属するイノシシ類の多くは、食糧残滓として他の遺物と混在して出土するのが常である。そのため、榎本哲氏（1978）が指摘するように、靺鞨文化の「雑穀栽培と結びついたブタ飼育とこれに伴う家畜儀礼が、生業形態を異にしたオホーツク文化と接触した際、そのブタ飼育という技術導入は行え得たにも関わらず、その信仰の面については、本来そこに根ざしていた信仰体系に組み入れられることがなかった」（90 頁）とみなすことができる。ただし、利尻町種屯内遺跡（前田・西谷 1997、種屯内遺跡調査団 2002）で刻文期に属する 3 号住居址の貼床面上から頭蓋骨 2 点が出土した例や、オホーツクコエ 3 遺跡（Шубина 2002）で後・末期の南貝塚期に属する 46 号住居址からイノシシ類のものらしき歯牙が得られた例は、靺鞨文化やそれに後続する女真文化に類する特異な取り扱いが、オホーツク文化においても稀にはあるが行われた可能性を示唆する（註 11）。

また、オホーツク文化期のイノシシ類利用には、(1)イノシシ類を盛んに利用するサハリンから礼文島、利尻島までの地域と、(2)イノシシ類をほとんど利用しない北海道本島との間に、明瞭な地域差が見て取れる。このような地域差が生じたのは、供給地である大陸からの距離の問題とともに、それぞれの地域における社会的要因が背景にあったものとみられる。このことは、金属品を中心とする大陸系遺物がイノシシ類の少ない北海道本島で豊富に出土していることから容易に察することができる。前述したように、当該期におけるイノシシ類の主要な価値はその肉にあったとみられ、礼文島や利尻島のように陸獣類の種類や生息数が限られた島嶼地域では、イノシシ類が特に強く求められたものとみなせよう。なお、この問題は、海獣狩猟文化の生業全体に関わるものであるため、後章で改めて論じることとする。

## 註

(1)近畿中国四国農業研究センターの敷地内に生息する野生イノシシに対して跳躍力の測定を行ったところ、成獣では 120cm の高さを飛び越えることができ、1 歳未満の幼獣でも、60cm の

- 高さを飛び越えたという（江口 2001）。
- (2)筆者分析による。
  - (3)筆者分析による。
  - (4)筆者分析による。
  - (5)フェドルチュク氏（国立サハリン大学）のご好意により実見させていただいた。未公表資料である。
  - (6)陥穴（今村 1988、佐藤 1989）の形状は多数あるが、そのうち、底部に刺殺用の槍が打たれているタイプのものは、生け捕り猟には適さないことが明らかである。
  - (7)筆者分析による。
  - (8)筆者分析による。
  - (9)これについて天野哲也氏（1977）は、その原因を飼料の確保の困難さや効率の低さにあるとみなし、イノシシ類の存在意義は嗜好品的な点にあった可能性を指摘している。
  - (10)なお、サハリン中部では、ザーパトナヤ 10 タイプ土器に伴ってイノシシ類の上顎骨が得られている。この土器群については、続縄文時代前半期からオホーツク文化期の十和田期の初期に併行する編年位置が想定されているため（木山他 2003）、オホーツク文化の最古の事例より、古く位置づけられることが明らかである。そのため、オホーツク文化の十和田期（新段階）に出現を見たイノシシ類については、サハリン中部以北を介して、大陸からもたらされた可能性も考慮する必要がある。
  - (11)春成秀爾氏の論考（1995）には、引用文献が挙げられていないが、「アジョールスク遺跡のオホーツク文化の住居跡内に豚の頭骨がおいてあった」（76 頁）との記載がみられる。ただし、同遺跡についての報告（ВасильевскийГолубев1976、Шубин1979）にはそのような記載が認められないため、誤記である可能性もある。